

第3章 整備計画の目標に関する事項

第1節 河川整備の基本理念

狩野川は、古来より幾多の洪水氾濫を繰り返し沿川の人々の生命と暮らしを脅かしてきた。その一方で各種の用水を供給するとともに自然豊かな河川環境を生み出しており、「ふるさとの川」として地域と密接な関係を保ってきた。

しかし、産業や生活様式の変化と昭和33年の狩野川台風により甚大な被害を受けたことにより、人々の関わりや関心も川から離れ始めた。

狩野川の将来目指すべき姿として、「連続性を基調とした川づくり」を基本理念とし、洪水から生命、財産を守り、地域が安定して暮らせる基盤の形成を図る中で、人々の心を再び狩野川に呼び戻し、かつての山から海まで一連となった川づくりを目指すものとする。

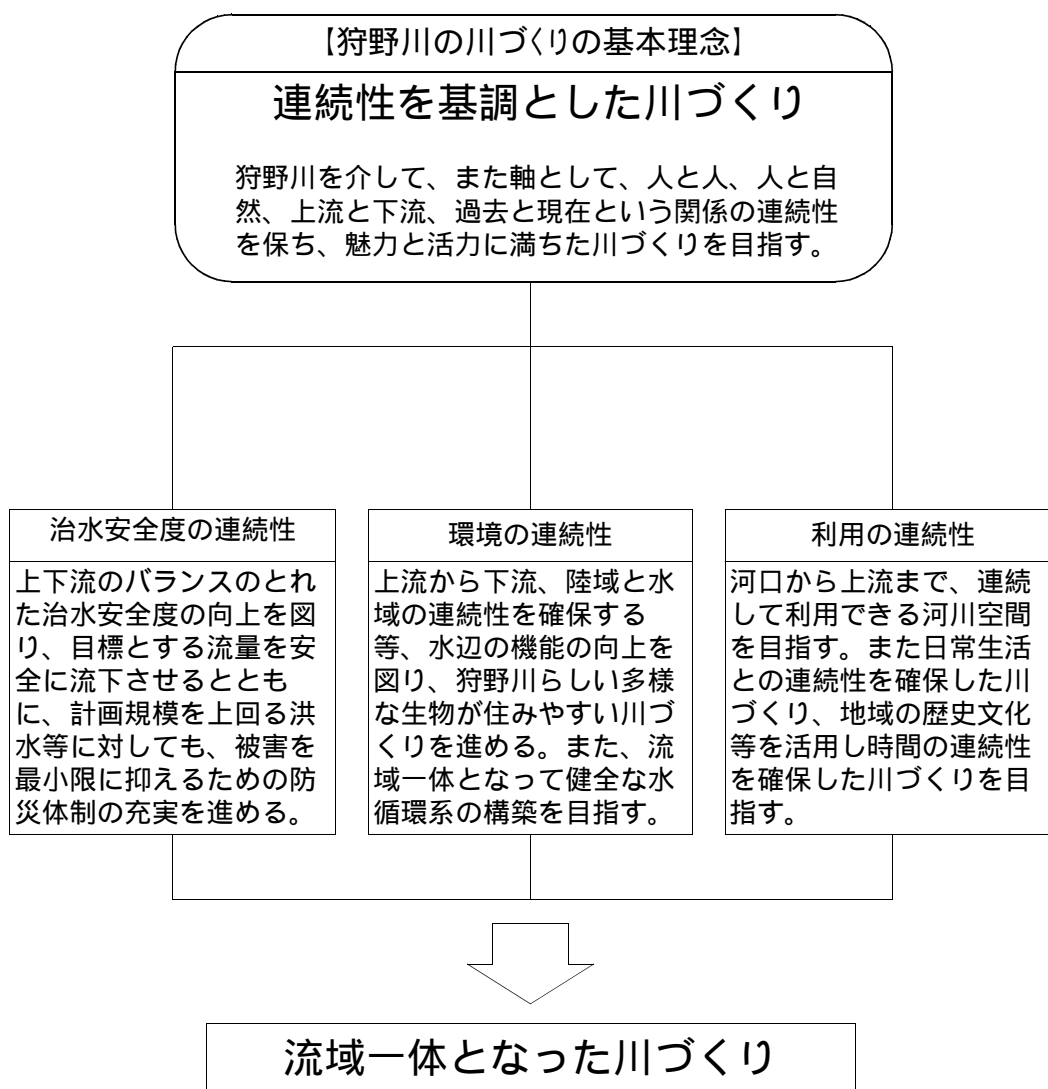


図3.1.1 狩野川の河川整備の基本理念

第2節 計画対象区間

本整備計画は、下記の表に示す区間を対象とする。

表3.2.1 計画対象区間（大臣管理区間）

河川名	上流端	下流端	区間延長 (km)
狩野川	静岡県伊豆市大字修善寺字飯塚290番の1地先の修善寺橋	河口	24.926
黄瀬川	静岡県駿東郡長泉町大字本宿字西ノ久根347番の3地先の寿橋	狩野川への合流点	2.700
柿田川	静岡県駿東郡清水町伏見字泉117番地先の湧水池	狩野川への合流点	1.200
大場川	左岸：三島市大場字城内2番の1地先 右岸：三島市中島37番の7地先	狩野川への合流点	2.550
来光川	静岡県田方郡函南町仁田字三中552番の1地先の仁田橋	狩野川への合流点	1.530
柿沢川	静岡県伊豆の国市長崎字新屋敷337番の1地先の長崎橋	来光川への合流点	0.860
狩野川放水路	狩野川からの分派点	河口	3.000
計			36.766

第3節 計画対象期間

本整備計画は、狩野川水系河川整備基本方針に基づいた河川整備の当面の目標であり、その対象期間は概ね30年とする。

なお本計画は、現時点における流域の社会経済状況、自然環境の状況、河道状況等を前提として策定したものであり、策定後のこれらの状況の変化や新たな知見、技術の進捗等により、対象期間内であっても必要に応じて適宜見直しを行うものである。

第4節 河川整備計画の目標

第1項 洪水、高潮等による災害の発生防止又は軽減に関する目標

狩野川の治水対策として整備計画の期間内に達成すべき整備水準を、過去の水害の発生状況、流域の重要度や整備状況等を勘案のうえ、投資規模等の社会的、現実的な諸条件を考慮し以下のように設定する。

1 河道の治水安全度確保

既往最大洪水（昭和33年9月狩野川台風洪水）を目標とする基本方針の整備水準に向けて段階的に整備を進めることとし、狩野川本川における当面の整備目標は、上下流の整備水準のバランス等を考慮して、狩野川台風に次ぐ規模の洪水（概ね50年に1回発生する規模の洪水に相当）が発生しても全計画対象区間で水位を計画高水位以下に低下させ、破堤等による甚大な被害が発生しないよう安全に流下させることを目標とする。このため、基準地点大仁で目標とする流量は $3,100\text{m}^3/\text{sec}$ とする。

支川については、近年の洪水被害の状況、改修の状況、本川とのバランスを踏まえて、既往最大洪水流量規模（概ね50年に1回発生する規模の洪水に相当）の洪水を安全に流下させることを目標とする。

また、侵食や洗掘による堤防、高水敷等の被災を防止する。

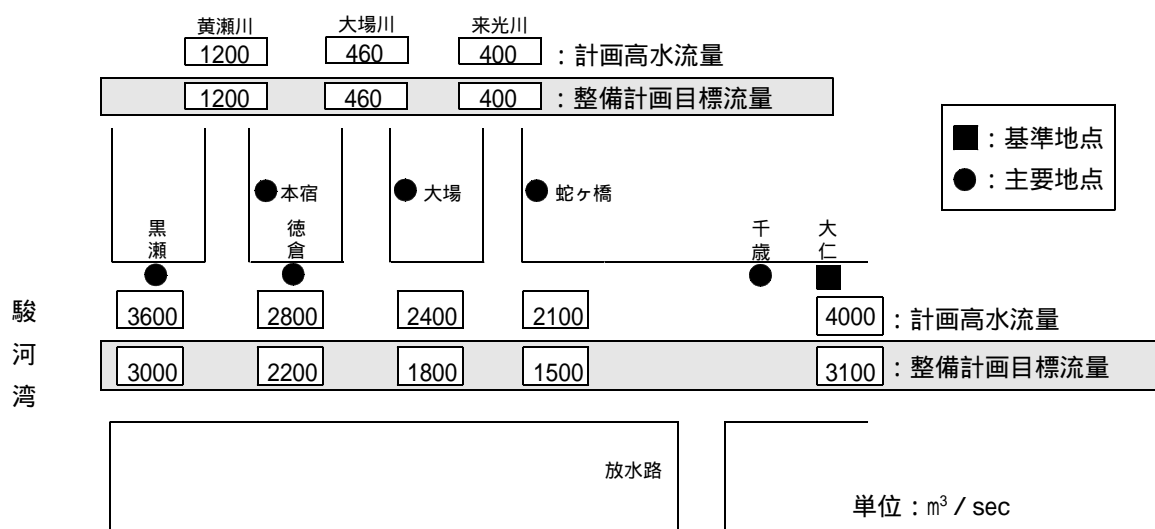


図3.4.1 整備計画目標流量図

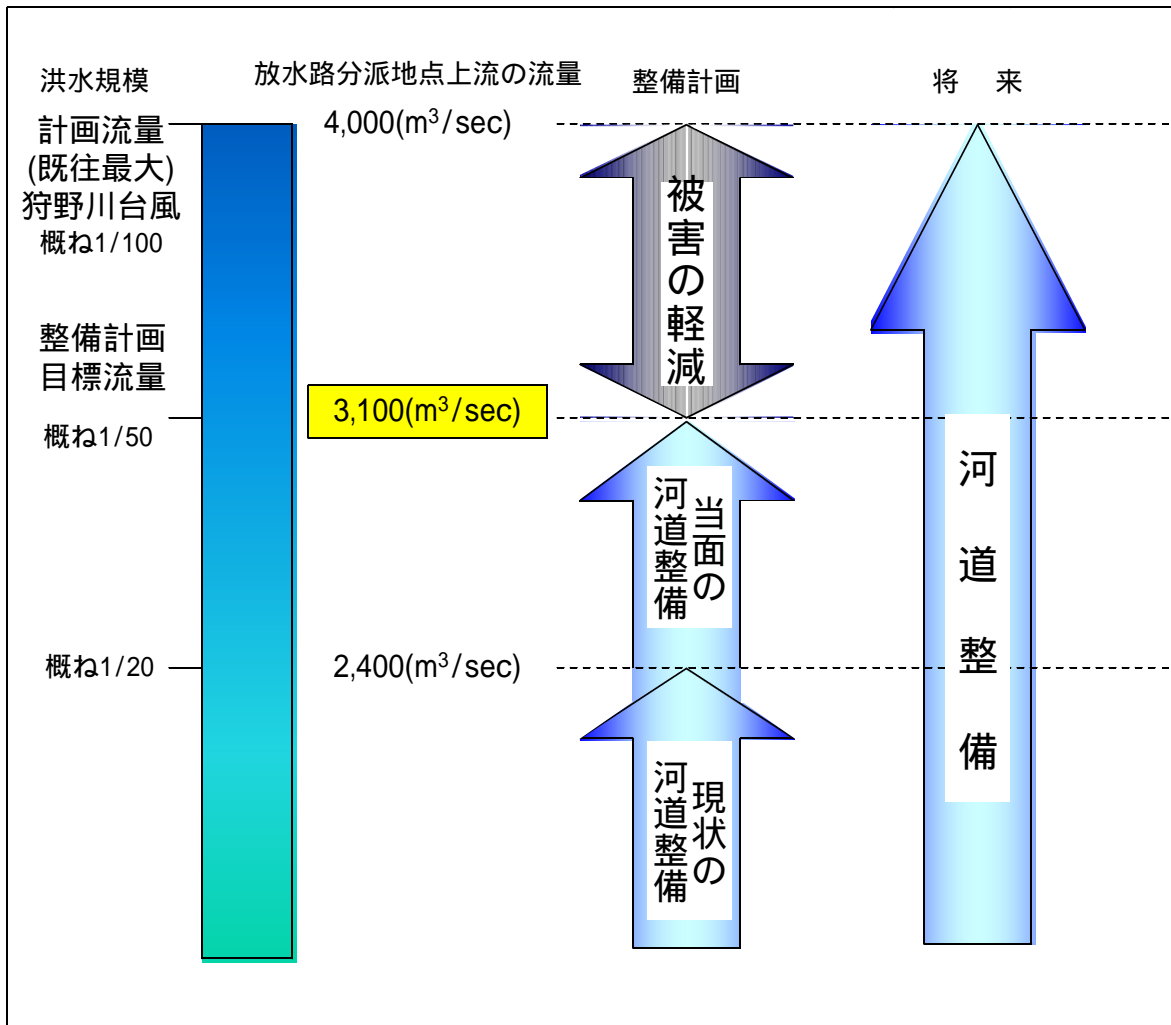


図3.4.2 河道整備の目標

2 内水被害の軽減

河道整備により外水位の低下を図る一方、近年の出水で内水による浸水被害が著しい地域については、支川等の管理者と協議の上必要に応じて内水対策を実施して、内水氾濫による床上浸水等の被害軽減を図る。

内水対策の整備水準は、内水対策地区の降雨規模が概ね20年に1回以下の実績洪水が再来しても床上浸水等の被害を解消することを目標とする。

3 地震・津波に対する安全性確保

想定される東海地震が発生し堤防沈下などが生じた場合の浸水による二次被害を防止するとともに、同時に発生すると考えられる津波による被害を防止する。

4 危機管理

計画規模を上回る洪水が発生した場合や、整備途上段階で施設能力以上の出水が発生した場合においても被害を軽減する。

第2項 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標

河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標は、狩野川における動植物の保護、漁業、観光・景観、流水の清潔の保持といった河川環境の保全や塩害の防止、流水の占用といった既得用水の取水の安定化等を考慮し以下のように設定する。

1 適正な河川水の利用

狩野川においては、現在、良好な河川環境のもとに駿豆地区の発展に欠かせない各種用水が確保されている。今後も流水の正常な機能や、現状の河川水利用が維持され、適正な水利用が図られるように努める。

2 水質の保全

関係機関、地域住民と連携し、生物の生息・生育環境や親水活動等に対して支障を与えない良好な水質の保全、さらに改善に努める。

また、水質事故発生時には適正な処理を行う。

3 健全な水循環系の構築

源流を含めた狩野川流域全体の健全な水循環系の構築を目指し、地下水利用の適正化、流域の水利用の合理化、上流域の森林保全、地下水涵養、下水道整備等を関係機関や地域住民と連携しながら流域一体となった取り組みを図る。とりわけ、減少傾向にある柿田川などの湧水は、地域の生活・産業を支える一方、貴重な環境を育んでいることから、その保全に努める。

第3項 河川環境の整備と保全に関する目標

河川環境の整備と保全に関する目標は、利用と保全の調和のとれた狩野川の川づくりを図っていくことを目指し、以下のとおり設定する。

1 利用と保全の調和を目指した河川空間の活用

生物の生息・生育場または景観場として保全すべき河川空間と、高水敷及び水面において利用を図る河川空間を区分し、それぞれの特性に応じた適切な施設配置や河川環境の保全に努める。

2 狩野川を特徴付ける良好な河川環境・景観の保全

治水安全度を確保しつつ、「生物の生息場として配慮すべき場所」又は「狩野川らしさを代表する場所」として抽出された箇所において、良好な河川環境、景観の保全に努める。

3 環境の回復、形成

河道掘削や樹木伐採といった河道整備に際しては、可能な限り環境への影響を回避する

とともに、必要に応じて影響低減、代替等の環境保全対策を実施する。

また、過去の改修工事等により狩野川らしさを代表する生物の生息・生育場や特徴的な景観が損なわれた箇所については、多様な生物が生息・生育する良好な河川環境の回復、形成に努めるとともに良好な景観の形成に努める。

4 柿田川の環境保全

湧水のみを源とし、類い希で貴重な自然環境を有する柿田川については、各種情報を広く一般に公開し環境保全の啓発を図るとともに、今後とも地域一体となって独自の河川環境を構成している生態系や湧水の保全に努める。

5 人と川との関係の再構築

山から海までの空間的な連続性や、川の歴史や世代間での川との関わりといった時間的な連続性を活かした川づくりを進めるため、人と川との関係の再構築を目指す。このため、地域住民が豊かな自然を備えた水辺空間と触れあい、多様な生物が生息・生育する河川環境を体感するため、自然体験活動に対する支援や住民参加による河川管理を推進し、また必要に応じて拠点施設などの整備に努める。